

霞ヶ浦のアユの生態 その2

1 アユが陸封化した特異な例

普通のアユは一生の前半を海で過ごし、後半を川で生活する「両側回遊型」の魚です。これまでの内水試の調査から、霞ヶ浦・北浦には一生海に出ない「陸封型」のアユが存在することが分ってきました（図1）。これまでに陸封型のアユが確認された湖は、琵琶湖（滋賀県）や池田湖（鹿児島県）などの比較的深くてきれいな湖です。霞ヶ浦・北浦のように浅くて富栄養化された湖では極めて珍しい例です。

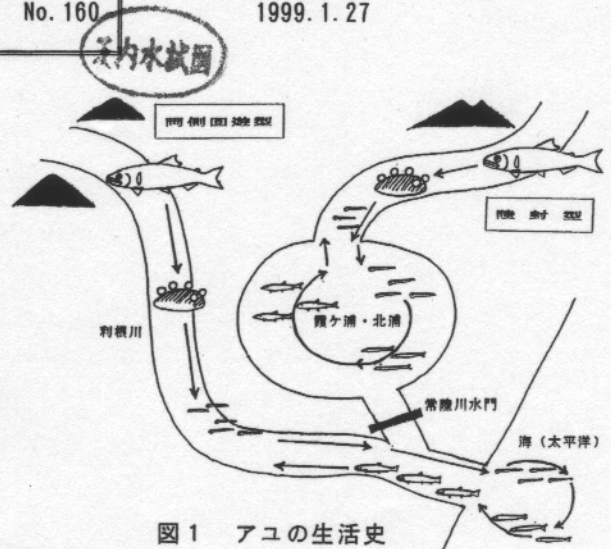
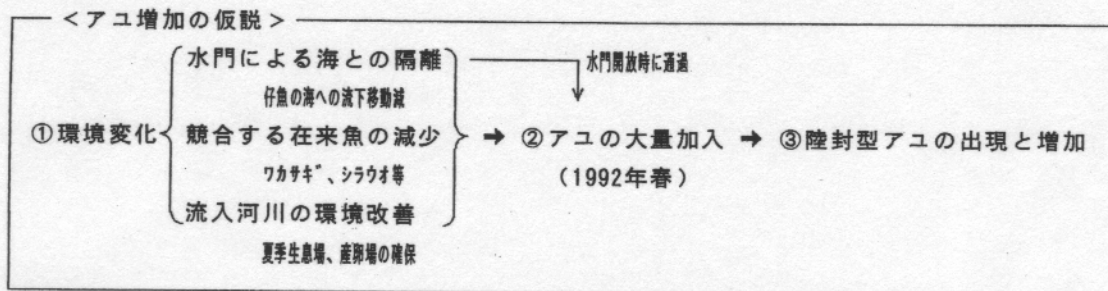


図1 アユの生活史

2 陸封型アユの出現と増加の仮説

1992年以降の霞ヶ浦・北浦におけるアユ漁獲量の増加は、新たに陸封型のアユが出現したためと考えられます。では、なぜ常陸川水門完全閉鎖後、20年近くもたってからこのような現象が起きたのでしょうか？下にその仮説をまとめましたが、この20年間で環境が徐々に変化し、陸封型のアユが存在するのに適した条件が整ってきた時期に外からアユが大量に入って来たことにより起こったと考えられます。環境条件のうち海との隔離は水門閉鎖後すぐに起きた現象です。しかし、在来魚の減少と流入河川的环境改善はこの20年間で徐々に変化したことです。アユが霞ヶ浦・北浦に大量に入って来たと考えられる1992年は茨城の他の河川（久慈川、那珂川等）でも海からのアユの遡上が大変多い年でした。

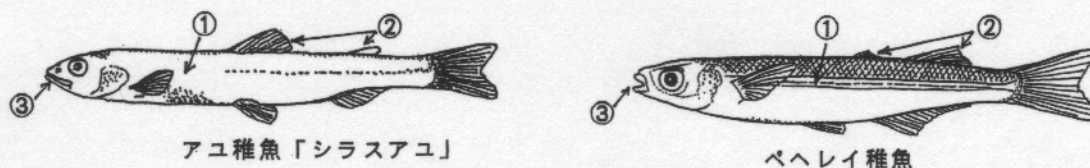


3 「シラスアユ」がいる冬の霞ヶ浦・北浦

真冬のこの季節、霞ヶ浦・北浦では陸封型アユの証しとも言える「シラスアユ」が分布しています。これはちょうどすずまりのシラウオのような透明なアユ稚魚のことです。現在、シラウオ刺網漁で「シラスアユ」の混獲が見られます。この量や内水試での調査（稚魚ネットなど）による採捕量が昨年よりも多いことから、今年のアユ資源は昨年よりも多いと見られます。この理由には、昨年夏に湖の水温が低く推移したこと、秋に流入河川の水量が多かったこと、仔稚魚の餌条件が良かったことなどが考えられます。

これから漁業者の皆さんによるワカサギ人工ふ化が始まりますが、例年この時の特採張網に「ベヘレイ稚魚が混じっている！」という声が聞かれます。今までこの様なケースで現場に行ってみると、全てアユ稚魚でした。アユ（特に冬の稚魚）も霞ヶ浦・北浦では「新顔の魚」なので間違えるのも無理はありません。図2にアユとベヘレイの稚魚の見分け方を図示したので、参考にして下さい。

担当：河川部



- ① アユは体に透明感があり、うろこがない。ベヘレイは不透明で、うろこがあり体側に銀色の線がある。
- ② アユは背びれの後ろに小さな脂びれがある。ベヘレイは背びれが2つあり後ろの方が大きい。
- ③ アユは口が大きく目の下まで開くが、ベヘレイは小さい。

図2 同サイズのアユ稚魚とベヘレイ稚魚の違い（体長5cm）